

## 平成 28 年度 食育推進に係る実践報告書

学校名	広島県立広島特別支援学校		
学校長氏名	新谷 慶子	栄養教諭氏名	尾中 滋子
職員数	124名	児童・生徒数	112名

### 1 学校における食育の現状（昨年度からの課題等）

昨年度は、各クラスで児童生徒の実態に応じた指導を心掛けたが、成果指標が漠然とした中で、どの程度の効果があったのか、把握しにくい。また、形態食のさらなる充実、保護者への食育なども、あまり進めることができなかった。

### 2 学校の食育に係る目標（成果指標・目標値）

学校教育目標のうち、「健康（自分を大切にし、心身ともに健康の保持に努める）」ことを食育の目標とする。実態が千差万別であり、胃ろうで経管栄養を注入するなど、通常の食事をとれない児童生徒も多数在籍しているため、成果指標は個々により大きく異なる。このため、全体の成果指標・目標値を設けず、個別の課題についての改善を目指して取り組んでいる。

### 3 食育の目標に対する具体的な取組

#### 【取組 1】（テーマ） 食に関する指導

授業実施クラスの担任と連携し、それまでの授業との関連性、障害の種別や程度によって理解度や表現できる方法（発言できる、カードを示せるなど）、家庭での課題などを確認し、教科の単元に応じた授業だけでなく、個々の実態や課題に応じたテーマで授業を行っている。

寄宿舎生については、主に夕食時間に言葉掛けを行い、食に対する関心をもたせるようにしている。

#### 【取組 2】（テーマ） 障害に応じた多様な食形態の実施

咀嚼、嚥下機能に課題を抱える児童・生徒のために、従来より行ってきた、きざみ、ペースト、二重ペーストの形態に加えて、なめらか食を新たに提供するようにした。なめらか食は、嚥下がうまくできない児童生徒に対して、誤嚥の危険性が低い状態で咀嚼を促し、咀嚼・嚥下機能の向上を目指すために導入したものである。導入に当たっては、校外の専門家の意見も聞きつつ、保健部職員が協議してすすめ、夏休みには、ゲル化剤の選定や形態の理解のための職員対象試食会、保護者試食会を行った。後期より、医師等によってなめらか食が適当であるとされた児童生徒に提供しているが、言語聴覚士と連携するなどして、現在も改善を重ねている。

#### 【取組 3】（テーマ） 資料の提供・情報の発信

毎月テーマを決めて、食育通信の配付、食育に関する資料の掲示を行ない、献立表、実施した献立の写真などととも、ホームページに掲載している。食育通信では、各クラスで行った授業の内容も簡単に紹介し、保護者にもよく知ってほしい内容については、さらに詳しく掲載するなどしている。また、毎日「きょうのきょうしよく」として、その日の献立名と、使用した食材・献立にまつわる話を掲載した資料を作成し、各クラスに配付して、朝の会や給食時の指導に役立ててもらっている。

夏休みに開かれた学校保健委員会では、食に関する指導の状況を説明した。

#### 4 「ひろしま給食100万食プロジェクト」の取組について

ポスター掲示、食育通信への掲載で、情報提供、周知を図り、期間中の家庭での喫食についてのシールはりを行った。また、献立の実施日には、毎日配付している「きょうのおはなし」のプリントの中で、職員、児童生徒への情報提供を行った。また、昨年度までの100万食プロジェクトの献立を実施するなどして、広島県の地場産物を知る機会として活用している。

#### 5 取組に対する成果と課題

##### 【成果】

どの取組についても、成果が数値としてあらわれるものではないが、食に関する指導については、指導のあとで、給食を食べる様子が変わったなどと、担任から報告を受けることがあり、成果があったと感じている。

また、障害に応じた食形態の実施については、これまでの形態よりうまく飲み込んでいる様子が見え、誤嚥の危険性が減っているようである。

##### 【課題】

食に関する指導については、児童生徒個々の実態が多岐にわたるため、その時に、担任が課題と感じる事柄についての指導内容になっている場合が多い。組織的、計画的、継続的に行えていない。どのようにしたらよいか、模索している。また、給食時間は、担任が安全に食べさせることに注力しているため、食に関する指導の時間としては活用できていない。

また、本校では、給食に使用することが適当でない食材がある。(嚥下に課題を持つ児童生徒の誤嚥や詰まる危険を避けるため、白玉など、粘るものは使用しない。形態食をつくるために、骨が多い魚、硬い食材、麦ごはんや炊き込みごはんなどは使用しない。多くの児童生徒が服用している薬剤との拮抗作用から、みかんなどの一部を除いたかんきつ類は使用しないなど) これらによって、献立のレパートリーが狭まり、指導内容も広げにくくなっている。

さらに、児童生徒の実態として、全介助者も多く、保護者に、「介助で抱えるため体重を増やしたくない」「水分を控えトイレ回数を減らしたい」といった切実な思いがあることも耳にする。この中で、「適正な量を食べることの大切さ」「栄養バランスよく」「水分摂取の必要性」といったことを指導することの迷いも感じている。

なめらか食については、思った以上に飲み込みやすいようで、誤嚥の危険性は下がったのだが、咀嚼がないまま飲み込む状況になってしまっている。咀嚼のため、柔らかい粒を残す、ゲル化剤を変えるなど、来年度までによりよいなめらか食を作れるようにと、現在検討中である。

#### 6 今後の取組に向けた改善方策について

どこに全体の目標を置くのかを明確にすることができず、成果指標・目標値が曖昧なままになってしまった。本校の実態に合った成果指標・目標値を決めたうえで、各取組の見直しを行うことでよりよい食育推進につなげることができると思うので、校内でしっかり協議していきたい。